

会議・視察報告 ■ Conference Reports・Inspection Visits

第6回「新しい北東アジア」東京セミナー
- ロシアのアジア民族から見た日本とロシア極東の将来像：モンゴルの文化的・地域的多様性と日本との交流可能性

ERINA調査研究部研究員 伊藤庄一

多国間・多地域間の視点から日本と「新しい北東アジア」を探る東京セミナーシリーズ（ERINA主催、笹川平和財団助成）の第6回が2005年7月21日、東京都千代田区の経団連会館で開催された。講師にゲンナディー・アイダエフ（ロシア・ブリヤート共和国ウランウデ市長）、ダムバダルジャ・バッチジャルガル（駐日モンゴル国大使館経済担当参事官）、ライサ・ブシェニチニコワ（ロシア国立東シベリア文化芸術アカデミー総長、ブリヤート共和国議会議員）、討論者に窪田新一（笹川平和財団事業部上席研究員）、荒井幸康（北海道大学スラブ研究センター21世紀COE研究員）を招き、ブリヤート人（ロシアのアジア民族）の視点から見た日ロ関係の展望およびブリヤート、モンゴル、日本と有形無形に繋がるモンゴル文化の地域的多様性について議論が展開された。

（アイダエフ）

「神秘の湖」バイカル湖沿岸のシベリアの都市の市民を代表し、皆様の前で発言する機会を与えてくださったことに厚くお礼申し上げます。

モンゴル系民族であるブリヤート民族は、バイカル地域一帯で形成された。バイカル周辺に居住するモンゴル民族については、マルコ・ポーロも旅行記の中で記している。歴史上登場するブリヤート系種族は多種多様であるが、17世紀にロシアの役人たちがこの土地に来て「ブラート（兄弟たち）」と呼ぶようになった。ブリヤート人こそが原モンゴル人と呼べる民族である。

日本とロシアは隣人であり、共に「G8」のメンバーである。互いの連携の重要性を両国は認識している。20世紀初頭、ロシアの著名な学者であるベルナツキーは「ロシアの未来はそのアジア地域の資源・経済の発展に大きく依存し、その開発はこの地域の国々との協力なくして不可能であろう」と力説した。福沢諭吉も、日ロ協力の重要性を強調していた。共通の価値の創造が見え始めた今日、将来的な協力の可能性は計り知れない。

歴史を振り返ってみると、20世紀初頭、ヨーロッパを目

指す日本人旅行者が、シベリア横断鉄道によって発展したベルフネウジンスク（ウランウデの旧称）を見たのが、彼らのロシアに関する第一印象であった。さらにそれ以前にも、当時の大動脈だった玉・絹・茶の道を行く中国、韓国、日本の隊商がバイカル湖周辺の諸都市及び町村を通過していた。

最近、ブリヤート人と日本人には物理的な共通性があることが明らかになった。日本列島のある島で、1万年以上前の日本最古の住民の墓が発見された。遺骨のDNAを調査し、他のアジア民族の特徴と比較した結果、それに最も近い遺伝子データが現在のブリヤート人から見つかった。この発見によって、「日本人の遠い祖先の一部は、新石器時代に大陸から日本列島に移住した。しかも、バイカル以東の大草原を移動した」という仮説を十分な根拠をもって立てることができた。ブリヤート人と日本人は、かなり遠いつながりかもしれないが親戚なのだ。

もう一つエピソードを紹介したい。ブリヤート人女性が自分の街で日本人捕虜の作った記念柱を目にし、家族に買ったサワークリームの瓶を彼らに差し出したという有名な話がある。この目撃者の談話のみならず、第二次世界大戦後に虜囚の境涯に苦しんだ日本兵捕虜の収容所に残された数百の墓もまた、あの辛い時代を想起させる。ウランウデ市民はこれらの墓の世話をし、記憶を風化させないようにしている。

ウランウデ市について少し紹介したい。市の歴史は1666年に始まり、「ウランウデ」という名称は1934年から使われている。ウランウデ市の人口は2005年1月1日現在で約38万人、平均年齢は2002年の国勢調査によれば34歳である。

1998年～2003年、ウランウデ市は経済危機を克服し、大部分の産業がダイナミックな発展を見せた。2001年、ウランウデ市は2002～2004年中期社会・経済発展計画を策定し、その結果、実質賃金が82.1%増、工業生産高が97.7%増、固定投資額が120%増となった。社会・経済発展計画の基礎は、市民の需要を満たすための環境整備であるが、社会・経済発展問題の解決は、隣接地域との長期的なパートナー関係の構築なくして不可能である。ウランウデ市は、モンゴル、日本、韓国、中国、台湾の10都市と友好姉妹都市関係を樹立して、対外関係の強化に努めている。なかでも特に重視しているのが文化交流の強化である。

ブリヤート共和国の外国貿易取引は、2004年末現在で約4億ドルであった。貿易黒字は約3億5,000万ドルで、そ

の要因は機械製品・食料品・石炭の輸出増大であった。原木も幅広い地域に輸出されており、うち3%は対日輸出である。

ブリヤート共和国では露天掘りのトゥグヌイスキー炭田の石炭輸出量を年間250万トンまで増加する計画がある。石炭輸出はアジア・太平洋地域、特に日本、中国、韓国に対して行われており、2003年時点で約180万トンの石炭を輸出し、約200万トンをロシア国内市場に供給した。同炭田はロシアの対日石炭供給の4分の1余を占めている。

2003年以降、日ロ貿易が急成長し始めている。2003年の両国間貿易高は42%成長し約60億ドルとなり、この内対日輸出は29%増の42億ドル、輸入は86%増の約18億ドルとなった。2004年には、前年比30%増となり、近年で最高水準の78億ドルに達した。今後、日本からの輸入はさらなる成長が見込まれ、2国間貿易はよりバランスの取れたものになる。3～5年以内に両国間貿易は100億ドルを越えると予想されている。近年、日ロ間投資協力でも良好な傾向が見え始めている。2004年末時点で、日本は対ロ累積投資額で第8位、直接投資額では第6位を占めた。

日ロ経済関係における戦略的協力分野は、エネルギー産業である。エネルギー資源の採掘、加工、輸送分野における巨大プロジェクト（例えばサハリン1、2、サハリン～日本間のガスパイプライン建設計画、太平洋石油パイプライン建設計画など）こそ、日本経済界の注目を集めている。日ロ経済協力上の課題は、東シベリアから太平洋に至るパイプライン・ルートを最優先で確保していくことにある。

日ロ間の観光交流については、昨年の統計データによれば、ロシアを訪れた日本人は7万人、日本を訪れたロシア人は4万人であった。ブリヤート共和国への観光ルートの開拓によって、この数値の拡大を図りたい。

日ロ両国が近年なし得たことは少なくない。中でも平和条約締結への活路を見出すための共同努力を継続し、全面的関係強化を通じた創造的パートナーシップを目指して行動するという共通の課題が定められていることは重要である。日ロ行動計画（2003年1月調印）では、日本とロシア極東・シベリア地域との貿易・経済交流及び協力の拡大や、日本の都道府県とロシア連邦構成主体の間及び両国都市間の交流の充実に関する問題の検討を含めた地域レベルでの交流の進展を図ることが明記された。

ウランウデ市はこの精神に則った対日交流を数多く実施している。第89番学校と共和国立ブリヤート第1高等学校で日本語教育が行われ、第56番学校の教育計画には、「日本の民話・寓話」、「日本の芸術」、「茶道」、「日本の宗教と信仰」、「日本の伝統工芸」、「日本の文化儀礼」などに関する

授業が盛り込まれている。

ウランウデ市と留萌市は2002年に姉妹都市提携30周年を祝った。これまでの30年間、代表団の交換、専門家やアーティストの交流が行われ、当市では毎年、日本映画フェスティバルが開催されている。

山形市とは1991年に姉妹都市協定を調印して以来、交流が拡大している。教育分野では、ウランウデ市がイニシアチブをとり、ブリヤート国立大学で日本語を学ぶ学生のために山形市長から日本語教科書や日本の歴史・文化に関する教材が寄贈された。

沿海地方ウラジオストク市及び日ロ協会と共同で、日本の諸都市をクルーズする「国際青少年芸術フェスティバル」が組織されている。今年は第20回日ロ沿岸市長会議（金沢市）を記念して開催される第2回国際フェスティバルに、ウランウデ市の子供たちのグループ「ナラン」がコンサートや歌、絵画、ダンスのコンクールに参加予定である。

その他、日本の姉妹都市との交流を促進する目的で、夏休みに日本の子供たちをウランウデ市とバイカル湖畔に招くプランを、在ハバロフスク日本国総領事館を通じて提案している。

日ロ関係の発展には限りない可能性が秘められている。しかし可能性を実現していくには一層の努力が必要なのは言うまでもない。

（バッチジャルガル）

ツェンゲル・モンゴル国会議員が都合により出席できなくなった為、代わって報告する。

北東アジアはきわめてポテンシャルの高い地域である。日本のような技術・経済大国と、地下資源・鉱物資源に恵まれたロシアやモンゴルがあり、技術プラス鉱物資源のポテンシャルが高い。他方で、残念ながら政治的な問題によって、全体的な発展がスムーズに進むことが難しい地域でもある。

この地域はモンゴル系民族が多い地域であり、モンゴル国だけでなく、ロシアにブリヤート共和国、中国に内モンゴル自治区がある。中央政府が努力しにくいことを地方が努力していくことが地域への1つの貢献になる。

モンゴル政府はグローバリゼーションの時代において、経済開放に力を入れている。特にモンゴルの北の国境アルタンブラグ、南の国境ザミンウドに自由貿易地帯を設置した。アルタンブラグはブリヤートに隣接し、双方の経済交流に大きな役割を果たすものと思われる。人と物の流れを自由化することが地域経済を活性化し、特に観光は実現可能性の高い分野である。例えばバイカル湖やホブスゴル湖

には、観光を促進していく上での大きな可能性が期待される。

(プシェニニコフ)

ブリヤートは以前から様々な文化が深く絡み合ってきた地域である。数千年にわたって異なる考え方の民族がこの地域を経由して西から東へ、また東から西へ移動し、その中で独特な関係や伝統が生まれ、多民族的な文化を形成する基盤ができてきた。このような多民族文化のトランジットは、ロシアの地政学的な利害を実現するためのブリヤート共和国、その文化及び伝統の重要性の根本的な要素である。それゆえに、ブリヤート人の文化・伝統の研究、それらの現代世界における役割の理解は非常に重要であろう。

ここ10年間、こうした分野に関する研究がたくさん行われてきましたが、多くの研究は狭い範囲、つまりブリヤート人が住んでいる地域に限られている。しかし、文化学とは文化・伝統をより広く、戦略的に把握するものである。

文化への科学的なアプローチは、多数存在する文化が質的に異なっており、それぞれユニークなものであることに基づいている。統一された文化はなく、各時代、各民族が独特の文化を持っている。科学は文化的な複数主義を認め、文化の役割、特に伝統における役割に関するかつての考え方を根本的に変えてきた。

数多くの論文及び予測から、国や民族の将来は文化及び伝統の発展シナリオに大いに左右されるという結論が導かれる。このようなシナリオを作成することは非常に重要である。なぜなら、グローバル化が伝統や文化に非常に大きな影響を与えているからだ。ロシアの有名な哲学者及び政治家であるドゥギンの「政治の哲学」という論文には、現在の政治事情の特徴が挙げられている。現代において双方向的な情報ネットワークが発展した結果、仮想的なポスト政治が現れてきたというものだ。バーチャルなものが現実的なものを駆逐し、その結果、いわゆるメディアクラシー社会が形成されつつある。だからこそ様々な民族の文化・伝統の維持、その近代化の問題をどう解決していくかが非常に重要なものになってくる。

文化・伝統に関する一連の研究調査の結果からは、常に変わりつつある世界で人間の共同体が生き残るための主要なメカニズムが何よりも文化的な伝統であることが言える。伝統は習慣、儀式などの人間活動を含む総合的な現象だからである。

文化的な伝統は、人種、民族など人間の共同体の遺伝的な進化プログラムの役割を果たしてきたと言われる。文化的な伝統の変動とは、ある社会的な固定観念がなくなり、

新しい固定観念が生まれる過程である。革新が文化的な伝統の固定観念の源であると同時に、固定観念が革新のために必要な前提条件である。現代の世界でも、文化的な伝統は、社会に必要な安定性を確保する多面的なメカニズムであることを忘れてはならない。このメカニズムがなければ、人間の社会的な活動は不可能である。

また文化学の専門家は、文化的な伝統の中に、人間が生き残り、価値を創造することを可能にする具体的なエネルギーや情報のパワーが内在すると考えている。社会の発展が可能かどうかは、我々の伝統及び文化全体に対する態度により決まると言うこともできよう。文化・伝統の重要性を過小評価すると、改革の質が低下し、近代化が前進ではなく、発展を阻止するものになりかねないのだ。

現在、文化的伝統がどうなっているのか、文化・芸術の発展にはどんなシナリオがあり得るのかを考えてみたい。文化的伝統及び文化学をどうやって社会経済問題の解決に利用できるかということを理解するに当たり、最も大きな妨げになっているのは、文化への博物館的なアプローチ、つまり過去のみを考えるアプローチである。多くの専門家は、科学全体が将来の社会発展に大きな役割を果たすと強調しているが、文化学の重要性はまだ十分に理解されていない。文化学がただの飾りであり、社会経済発展を予測・計画する時に無視しても良いという考え方が圧倒的である限り、社会発展は最小限にとどまるだろう。また、現在の時代的な変動により、文化的伝統の条件が変わってきていることも理解すべきである。文化が遺産や伝統を現実化していた時代とは異なり、現在は文化自体の中にこれまでの蓄積や構造的に異なる伝統が同時に存在している。文化的伝統が効力を持つ期間が短くなってきた結果、社会が生活環境に与える影響が少なくなり、逆に環境が社会を混乱させる可能性が高まっている。社会が発展する上で文化・伝統が持つ戦略的な意義を改めて強調したい。

現代の文化人類学からブリヤートの文化的伝統を考えてみたい。ブリヤートの最も重要な伝統には、環境に関するものが挙げられる。自然との調和、自然への畏敬の中に、自然を合理的に利用する秘訣がある。その中に、自然、精神的な文明の発展のメカニズム、生命力及び独特な情報空間などについての知識が蓄積されている。

もう1つのブリヤートの根強い伝統が、天と年長者への崇拜である。ここでは行為や生存ルールを決めるタブーが形成され、行動規範となってきた。また、狩猟、漁業、農業、建設、商業、医療などがうまく行くために、精霊に贈り物を上げ、善を信じ、多面的な伝統が形成されてきた。

現代のブリヤート人の生活で大きな意味を持つのが血

縁、特に先祖と関わる伝統である。天地、生命、人間の謎についての古代知識を吸収してきたブリヤートの宇宙観に基づく伝統も興味深いものがある。最も重要な点は、これらの伝統がすべて民族を維持し、生き残るためのものであることだ。

世界のゲノムというものがあるが、それは世界の発展を決める30の暗号を含むエネルギー・情報パッケージであり、道徳性、精神性、教養、母なる大地を大切に作る心など、個々の民族の文化的伝統に秘められた人間の高い文化と関わっている。今日、人間の潜在能力の開発が大きな動きとなっている。プーチン大統領が2000年9月に開催された国連のミレニアムサミットで、「我々は文化及び伝統の豊かさを基盤にして平和、繁栄、安定、安全への道を歩むべきである」と強調したのも偶然ではなからう。

(窪田)

私は1983年から86年まで内モンゴルで中国の農地改革の歴史を研究した。その後ベルリンの壁が崩れる頃、JICAにできたモンゴル政策支援委員会のメンバーとして活動した。したがって私の話は中国の内モンゴルとモンゴル国に両方から見た話になる。

ブリヤートが歴史的に北東アジアないし極東シベリアの経済活動・流通分野で地域的に重要な役割を果たしてきたことについては、アイダエフ市長と考え方を同じくする。発言にあった「Tea Road」(中国の茶がモスクワへ行く道)におけるキャフタの果たした役割は、キャフタの博物館を訪れば直ちに理解できよう。この地域が経済活動の発展に重要な地理的な意味を占めている。内モンゴルにおいても同様に、東西の大きな文明の間において、流通を促進させる役割を果たし、これからも果たしていくことは間違いない。現在においても、1990年以降、ロシア、モンゴル、中国はこの地域の経済活動の円滑な発展に寄与する政策をできる限り採択してきた。貨物の流通増加の現状、今後の増加予想に関するERINAの分析に基づけば、この地域の経済活動の密度はますます濃度を増すものと考えられる。

1994年以来、この地域の経済活動促進のため、ウランウデ、ウランバートル、フフホトの商工会議所が協定結び、共同して情報交換、経済協力を努力してきた。しかしながら、この地域への日本の投資は決して盛んではなかった。太平洋石油パイプラインが今後の投資増加につながるのではないかと推測される。

日本海側の多くの都市が姉妹都市交流を築いており、それに基づいて観光交流が進められている。この地域全体の観光開発が今後も重要な位置を占めることは間違いない。

姉妹都市交流だけでなく、太平洋側を含めた日本全体をターゲットにした動きは、モンゴルでもブリヤートでも、まだ不十分ではなからうか。この点、中国の内モンゴルはかなり違った様相を示している。中国の地方政府による開発、地方政府同士の交流、経済協力などが、姉妹都市交流を中心に盛んになった。今後の発展が期待されよう。

かつて交流を阻んでいた安全保障上の問題は影を潜めつつある。領土問題、平和条約の締結などの懸案は、相互において実態が明らかになりつつあり、如何に解決すべきかという課題を地域の人々が共有している点が過去と大きく異なっている。この点を起爆剤として、地方相互の経済交流が進むことが期待される。

(荒井)

ブリヤートという名前を私が知ったのは、子供のころにさかのぼる。小学校のころに読んだ絵本に、シベリア・ロシアの少数民族を紹介するものがあり、ブリヤートに関する紹介もあった。ブリヤート人は最初にロシア人とコンタクトした際、非常に親切にした為、ブリヤート人は兄弟のようだというので、ロシア人が兄弟という意味のロシア語「ブラート」で彼らを名づけたのだと書いてあった。それは私が、歴史上さまざまな民族同士が戦い合っているということを知り始めたころであったため、最初から他人に親切な人々としてブリヤートという名前は私の記憶の中に非常に強烈に刻まれた。ブリヤートという名前の起源については諸説あり、残念ながら、ロシア語の兄弟という意味からきたという説はあまり支持されているわけではない。

アイダエフ市長が述べたとおり、われわれ日本人のDNAに一番近いDNAを持っているのはブリヤート人である。実際、ブリヤート共和国のあちこちを歩くと、日本の芸能人の方や自分の親戚や友達に似た人々に会うことがよくある。以前、ウランウデの文学博物館で学芸員をしていた人物はあまりにも女優の野際陽子さんに似ていたので、写真を撮って、日本の友人に見せて歩いたことがあるほどだ。つまり、ブリヤート人が日本人と血を分けた兄弟という説もうなずけてしまう。

そんなブリヤート人は現在、ロシア、中国、モンゴルの3地域に住んでいる。これらの人々に共通しているのは、もともとバイカル湖の東西の広い地域の出身であるという記憶である。1689年のネルチンスク条約や1727年のキャフタ条約により、シベリアにおけるロシアと清朝との国境が画定された。清朝の支配下に入った南のモンゴルと、ロシアの支配下に入った北のブリヤートとの間には、国境線が引かれたわけだが、さまざまな理由で国境線を行き交う

人々がいた。それが落ち着き、ロシア側に入った人たちは次第にブリヤートという名前を帯びていった。

18世紀以降、ブリヤート人が国境を越えて再びモンゴルや中国に向かう理由には、ブリヤート内の内部抗争やロシア人移民者との関係など、さまざまなものがあった。もっとも多くはブリヤート人がロシアを去る原因となったのは、ロシア革命とそれに続く内戦の混乱を逃れるためであった。モンゴルに向かったブリヤート人の中には、そのように内戦を避けた人のほかに、自らの意思で向かった人たちもいる。彼らは1911年に辛亥革命と共にモンゴルにも独立の気運が高まったときに、これを助けるために渡った人たちである。彼らはロシアで教育を受け、技術を学んだ人たちであり、それをモンゴルで生かそうとしたのだ。

今日のモンゴルにおいても、ブリヤートは非常に重要な人々であることは間違いない。その1つの例として、今年5月のモンゴル大統領選挙の結果、当選したエンフバヤル氏はブリヤート系であることを付け加えたい。

モンゴルとロシアの間のブリヤート人の行き来は比較的自由にできたと思われるが、中国とは中ソ論争の中で国境が閉ざされたまま行き来が難しかったようだ。ゴルバチョフ時代によやく中ソ国境が正常化し、国境が開かれた。中国に住むブリヤート人のかなりの数が1990年前後に自分たちの故郷だった土地を訪れ、移住を決めた。残念ながら多くの方がロシアでの生活に適應できず中国に帰っていったが、70年間のソビエト政権の間に文化的な遺産を失ったロシアのブリヤート人たちにとって、文化を復興しようとするときに中国のブリヤート人に保たれていた文化遺産が大きな役割を果たしたと言われている。こうして現在、ブリヤート人たちはロシア、モンゴル、中国に自らのアイデンティティを保ちつつ根をおろしている。最近では3カ国のブリヤート人たちの交流も盛んになっている。

振り返って日本とブリヤートの関係を見ると、実は遠いようで近いものであることがわかる。ウランウデには革命の記念碑があり、そこにはさまざまな言葉で革命のために亡くなった人々をたたえる文字が刻まれており、日本語もある。誰と特定はできないが、ウランウデでの革命に何らかの形でかかわった日本人がいたのではないかと思われる。

1919年から1924年まで日本はシベリア出兵を行ったが、この時期、日本のシベリアへの干渉は少数民族への援助という形でも行われた。シベリアにおいて有力な少数民族であるブリヤートもその援助の対象となった。これは残念ながら後に多くのブリヤート人が「日本のスパイ」だったとして1930年代に肅清されていく遠因にもなっていく。

また日本が1932年に中国東北地方に建国した満州国にも

ロシア革命を逃れてやってきたブリヤート人が住んでいた。総人口にして3,000人ほどであったが、満州国軍には少なからずブリヤート人がおり、中には最後に陸軍中將にまでなった者もいる。また、この時代に日本式の教育を受け、さらに日本で学んだ人間もたくさんいる。作家の司馬遼太郎が『草原の記』の主人公として書いたツェベクマモそのような人間の1人である。戦後60年目となり、その世代の人間はいまやだんだん消えつつあるが、ブリヤートの歴史の中で日本とはそれほど大きな存在であった。

第二次世界大戦後にソ連に抑留された日本人の中には、ブリヤートの各地へ送られた人々がいる。ウランウデ市のオペラ劇場もそうして送られた日本人によって建てられたものだと聞く。こうした苦しい状況にあった日本人たちと同じ仏教徒として何かと助けたブリヤート人がいたことは、ブリヤート人からも、日本人からも聞いている。

モンゴルでも、ブリヤートでも、日本は第二次世界大戦中敵国であったにもかかわらず、日本に親近感をもつ人間がたくさんいる。同じアジアの国として、また同じ仏教を信じるものとして、経済的に豊かな日本にあこがれているという人間に少なからず会ったことがある。

ブリヤートと日本の間にも、未来に向けた交流が始まっている。ウランウデにあるブリヤート国立大学と日本の山形大学との文化・学術交流もそのひとつの例といえよう。また、経済的にもガスパイプラインができれば日本との関係はより深まるであろう。

観光は、日本・ブリヤート間の交流における重要な要素となるであろう。少し南のモンゴルには近年、1万人近い日本人観光客が訪れているからだ。

モンゴルの首都ウランバートルからウランウデまでは飛行機でも2時間かからない距離にある。シベリアの広さの中では、ちょっと足を伸ばせば届く距離であるということだ。そこで質問であるが、モンゴルを通り、モンゴル各地に散らばる日本人旅行者をブリヤートへ呼び込むことが出来れば、アイダエフ市長が話したとおりに観光客の数が格段に増えると思われる。この点に関して市長はどの様に考えるか？また、モンゴルを通過してやってくる日本人観光客に対してブリヤートが魅力的であると主張できるものは何か？ブリヤートでは是非見て欲しいということがあれば伺いたい。

また、かねてから考えていたことであるが、ブリヤート人の言葉、ブリヤート語は日本語に文法的に似ており、ロシアにいるさまざまな民族の中で日本語の習得をブリヤート人に有利にさせているように思われる。現に、イルクーツク州では、大学で日本語を教える先生にブリヤート出身

者が多い。また、仏教を信仰する人々が多いという共通点もあり、考え方もほかのロシアに住む民族よりもより日本人に近いと感じられる。そこでプリヤートは文化の上でも言語の上でもロシアの中で日本にとり伝達者としての位置を占める可能性があると考えられるが、この点に関して市長はどのように考えているのか？

ロシアのシベリア・極東地域はこれから日本にとってますます重要な地域になると思われる。その中でプリヤートはどのような地位を占めるのか、あるいはわれわれがどうプリヤートの人々と交わっていくべきなのかについて、アイダエフ市長の報告は非常に参考になった。われわれがブラート、つまり兄弟として、交流が盛んになることを祈念したい。

(アイダエフ)

外国人旅行者がプリヤートのどこに魅力を感じているかといえば、まずバイカル湖である。世界の淡水の70%がバイカル湖の水で、世界で一番深い湖である。残念ながら、このバイカル湖の魅力は現時点で十分に活用されていない。バイカル湖観光のインフラはまだ不十分である。モンゴルの歳入の4分の1が観光収入であるという事実は羨ましい。ビジネスとしてのツーリズムが速いテンポで発展しているが、私たちも見習いたい。今回の訪日で山形市長に面会し、明日は新潟市長とも話すが、モンゴル経由でプリヤートへ日本の観光客に来てもらう提案をしたい。パッチジャルガル参事官が述べたように、モンゴルのホブスゴル湖とバイカル湖を結ぶアイデアに賛成する。イルクーツクと日本の航空路の活用も重要だ。

大量の観光客を受け入れる準備は十分にできていない。ウランウデにいくつかあるホテルは最大で4,000人規模の受入れが可能であるが、夏場は満杯に近い状態であり、急な訪問者への受け入れ準備ができていない。現在、モスクワの複数の企業と観光促進プログラムを協議しているが、バイカル湖周遊や宿泊施設を含めた観光プログラムを充実させていきたいと考えている。モンゴルを通じて日本からの投資が来る可能性もあろう。

日本の企業家がロシアになかなか投資をしていない理由として、政治的不安定があったことは周知の事実であるが、プーチン大統領が就任してから状況は大きく変わった。トヨタがカムリの製造工場をサンクトペテルブルクに作る事が決まった。今年11月にはプーチン大統領の訪日が発表されている。今後ますますチャンスが大きくなるであろう。

(ブシェニチニコワ)

日本の伝統文化はロシアでもよく知られており、文学、映画、演劇などの愛好家がたくさんいる。こうした交流をより活発にし、お互いのことをよく知っていけば、経済や社会的な問題も解決する手立てとなり、北東アジア全体の関係がより密になっていくであろう。知的ツーリズムを通じて魅力的なことがたくさんできると思われる。

(窪田)

プリヤートでは、日本語を勉強した後、それを生かしていく手段があるのか。

(アイダエフ)

日本語教育課程を修了した場合、2つある日本語学校の教師なることくらいしかない。日本企業の事務所などはまだない。

中村正董(帝京大学教授)

私は以前、新潟大学の留学生センターにいたが、新潟大学には多くのロシア人、モンゴル人の留学生がいる。大相撲ではいま、モンゴルとロシアの人がリードしている感があり、それが親しみを増している。プリヤートでは大相撲が放送されたり、相撲があるのか また、プリヤートの輸出品目とは、具体的に何か。

(アイダエフ)

モンゴルの力士はプリヤートの力士に比べ大きな成果を上げている。現在18歳のプリヤート出身の力士があり、12歳で来日し、7年目になる。本国からは大きな期待が寄せられ、先日2年ぶりに帰郷した。ウランウデでは国技の格闘技があり、テレビでも中継され、高い人気がある。私たちは相撲もそのバリエーションの1つと考えている。18歳の力士が帰郷したときもテレビ放映され、一躍ヒーローとなった。

現在、最大の輸出品目は石炭である。日本からの輸入品目は、主に乗用車であり、プリヤート人の乗用車の7割が日本車で、その次が韓国車である。

谷浦孝雄(共栄大学)

モンゴルの経済特区の成果について教えていただきたい。

(パッチジャルガル)

モンゴルの経済特区とは、所得税を減免し、土地の使用料を軽減する一定の地域をモンゴル国家大会議で定めるも